

エジプト駐在武官

日誌(11)

スエズ運河と日の丸

榊枝 宗男 陸自75

世界2大運河の一つであるスエズ運河は、地中海と紅海を結ぶ全長2百kmの海上交通路であり、貿易、文化、軍事面で重要な役割を果たしている。

1869年、旧統治国のイギリスが、数十万のエジプト人労働者を使い、砂漠地帯を堀開し完成させた。その幅は約3百m、水深20mで、諸外国の巨大タンカーや商船、時には大型空母が通航し、中間点の大ビター湖でそれぞれ退避、交差する。通航所要時間は、船団を組むため準備時間を含んで2日かかる。

このスエズ運河には、当時(1992年頃)もわが国のODA(政府開発援助)によって、日本の建設会社が運河の両岸拡幅工事を担当し、約80名の日本人関係者が現地に常駐している。また、3年に1度、海上自衛隊の練習艦隊も訓練航海でここを通過する。

在勤中、「かしま」、「あさかせ」の練習艦2隻がインド洋からヨーロッパへ向かう途中で運河を通航し、エジプト第2の都市アレキサンドリアに寄港することとなった。早速、スエズ運河

岸やエジプト国防省と調整を実施したが、この際、毎回問題となるのはスエズ運河の通航料で、その料金は通過時の石油価格に連動して毎日変わる。つまり、運河を使用せずに、南アフリカの喜望峰を大きく回って航海する際の石油燃料代より若干安く設定されているのがミソだ。

通航当日、エジプト人のパイロット(水先案内人)5名を乗せて練習艦はゆつくりと北上して行った。前述の建設会社の作業現場に差し掛かると、両岸から社員の皆さんによる歓迎・激励の日の丸の小旗が振られ、また乗り組んでいる実習生たちも甲板に出て整列



して敬礼を行った。

日本から遠く離れ、中東の地で久しぶりに見るマストの日の丸は、それぞれの故郷や家族を思い出させる。外国で見る日の丸は、さまざまな価値観の違いを超えて、日本人の郷愁と望郷の念を感じさせていた。



スエズ運河を航行する練習艦「かしま」甲板上で
大使館職員